

アジェンダ NOVA ながさき 市民セミナーヨ 2020

「長崎のキリシタンとバチカン」

第一講「天正少年使節とバチカン」

2020年7月2日(土) 滝澤修身(長崎純心大学)

報告内容

はじめに

- 1、新たなる研究視点
- 2、史料紹介
- 3、歴史的な前提—スペインを中心に—
- 4、少年使節団の旅

- (1) ヴァリニャーノと天正使節団
- (2) ポルトガルに向けて
- (3) スペイン
- (4) イタリア
- (5) 再びスペインへ
- (6) 帰国後

おわりに

史料① イエズス会宣教師ルイス・フロイスの『遣欧使節行記』には、日本人少年がトレドを訪れた時の感想が記されている。

「この町には25,500人余りの住民がおり、22の小教区、各修道会の女子修道会が23、男子修道院が13、病院が8つある。住宅はヨーロッパ風で、石、漆喰、石材で作られ、建築法は大いに優れ、日本の家屋とは比べようもない。人口が多く、裕福であり、商売取り引の盛大な市には、立派な絹布、金蘭、その他の商品を扱う商人で栄えている。装飾の行き届いた街路には職人たちが満ちている。容貌は男女とも色白く、優雅であって、その行いから気品のある申し分のない人たちと思われる。」

史料② ルイス・フロイスの『遣欧使節行記』には、このエル・エスコリアル宮殿の様子が描写されている。「多くの優美な噴水、幾つもの端正な像、魚類、小鳥、白鳥の遊ぶ大きな二つの池があり、さらに多くの鹿、兎などの動物がいた。このエスコリアルは、サン・ロレンソの修道院より、4分の1レグア、マドリードより7エグアの距離にある。その豪華、壮麗、雄大さは、ペンでは書き尽くせないほどである。」と記されている。

史料③ フェリペ2世よりカルタヘナとアリカンテの海軍長官へのスペイン語による書簡は、ルイス・フロイスの『遣欧使節行記』に収録されている。

国王からカルタヘナに宛てた手紙

カルタヘナにある我が艦隊の長官ならびに監察官へ。本年、日向の王の孫ドン・マンショ、有馬の王の従弟ドン・ミゲルおよびドン・ジュリアンとドン・マルチノが、イタリアに行く目的でカルタヘナに赴く。彼らに以下の取り計らいをするように命ずる。彼らと随行者を快く迎え、十分に気配りし、持ち運んでいる衣類などを遅れることなく通過させること。もし、カルタヘナにイタリア行の船が停泊しているならば、彼らを乗せ、我が名において航海に必要な物資を提供し、十分なる心遣いをなすことを命ずる。

マドリードより、1584年11月24日

史料④ 国王よりムルシアの市長ドン・ルイスに宛てた手紙

ムルシア、ロルカ、カルタヘナ諸市の、市長ドン・ルイス・アルティアガよ。日向の王の孫ドン・マンショ、有馬の王の従弟ドン・ミゲルおよびドン・ジュリアンとドン・マルチノが本年、日本よりやってきた。イタリアに行く目的で、カルタヘナに赴くことになる。朕は、貴下に対し、彼らを十分に配慮し、随行員にも待遇を与え、彼らの衣類等お遅滞することなく通過させることを依頼する。またカルタヘナにある我が艦隊の長官に対しても同様のことを依頼する書簡を書くことにした。カルタヘナの港にイタリア行きの船があるならば、彼らを乗船させ、航海に必要な物資を提供することを命ずる。

マドリードより、1584年11月24日

史料⑤ 《スペイン国王よりローマ駐在大使オリバレス伯爵へ

我親族で顧問会の議員、そして大使である伯爵、日向の王の孫ドン・マンショ、有馬の王の甥ドン・ミゲル、ドン・ジュリアン及びドン・マルチノはキリスト教に改宗し、スペインに渡ろうと考え、イエズス会の神父数人と共にスペインに到来した。少年たちは神父の一人と一緒にローマへ行き、教皇の御足に接吻しようと考えている。少年たちは、日本に帰り、彼らに与えられたこの好機を喜び、他の者たちが少年たちを真似るようにするために、何か必要である時は、彼らに援助を施し、名誉を与え、好意を示し、教皇庁でも十分な待遇を与えることを命ずる。このような厚遇は、彼らの身分、そして彼らが良き道を選んだことに対して当然である。少年たちが無事ローマに着き、教皇が彼らに厚遇と恩恵を与えたという報告を待とう。

1584年11月24日 マドリードより日本人等のためにオリバレス伯爵に送る。》

Simancas 古文書館蔵

史料⑥ ダニエル・バルトリの『耶蘇会教会史』には、少年たちの学位式への参加の様子が記されている。

「かの有名な大学で行われた荘厳な学位授与式に参加した。大学の門では、学長、教授、学生、多数の紳士が、使節を迎えた。この待遇は、王家の人々、教皇の大使に対してしか行わないものであった。使節は、通常は諸侯が座る座席についた。学長は、使節を称賛し、感動と愛情のあふれる演説を行った。使節は、すでにスペイン語が分かっていたので学長の演説が理解できた。理解できないところもあったが、真摯な参列者の目から溢れる涙を見て、十分に言葉の意味が理解できた。使節と多くの来賓者は、極めて静かに退出し、各自深い市内の面持ちであった。」

史料⑦ 《大村純忠よりローマ教皇への書簡

非常に無礼なことですが、主の恩寵により、慎みてこの書簡を教皇に書かせていただきます。教皇様は日本では神の代理です。また、全キリスト教世界の聖なる恩師であり学匠です。それ故に、私は海を渡りローマに行き、あなたの御足に接吻し、頭を下げるつもりでした。しかし雑務に追われ、それが果たせません。今、イエズス会の巡察師殿が、このように遠く離れた日本に渡来し、感謝すべき多くのことをなしてくださいました。今、巡察師殿はローマに帰ろうとされています。この好機に、私の甥の千々石ミゲルを同行させます。あなたの御足に接吻するほどの功德もないことは十分に承知ですが、敢えてそれをさせていただけれることを、大変感謝しております。謹んであなたに望むことは、日本、日本教会、そして私を覚えておいていただくこと以外、何もありません。私は巡察師殿、千々石ミゲルに詳細を伝えました。私は、大変なる羞恥、道理、畏怖をもってこの手紙を書かせていただきました。

主の化身の年 1582 年 日本の第一月 27 日 手を挙げて拝み、神の代理として最も聖なる教皇の足下にひれ伏せます。

ドン・バルトロメ》

マドリードの古文書館所蔵